

イザヤ書5章1-2節 「愛する者への歌」

1A 神の選びと召命

1B 実を結ぶための救い

2B 神の憐れみ

2A 神の関わり

1B 志と願い

2B 良い業を完成される方

3A 育てられる実

1B 愛の応答

2B 悪い実

本文

私たちのイザヤ書の学びは、先週は2章まで読みました。今日は3章から5章までを読みたいと思います。今朝は、5章1-2節に注目したいと思います。

5:1 「さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。5:2 彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。

預言者イザヤがユダの国とその都エルサレムに向かって、神の言葉を伝えています。イザヤは説教調で彼らに語っていましたが、もしかしたら人々の耳が自分に傾いていなかったのもしれません。それで歌をうたいました。人々の注意をこうやって引き寄せていたのかもしれませんが、それは、ラブ・ソングでした。「わが愛する者のためにわたしは歌おう。」と言っています。ここの主語「わたし」は、主なる神のことでしょう。愛する者とは、彼らのこと、ユダまたイスラエルのことです。そして、ぶどう畑とありますが、農夫がぶどう畑を、実が出るようにあらゆることを愛情を込めて行なっていました。同じように、神がイスラエルとユダをこよなく愛して、手塩をかけて育ててきたことを話しています。そうしたら、「甘いぶどう」とありますが、これは良品種の、おいしいぶどうのことです。それを期待していたのですが、なんと「酸いぶどう」が出てきました。これは悪いもの、腐って臭ってくるような言葉になっています。ですから、せっかく愛の歌を歌っていたのですが、ここで一気に興ざめして、それで3節から再び説教に戻って、彼らに神の警告の言葉を語ります。

1A 神の選びと召命

今回も、私たちが前回学んだことの続きです。福音を初めて聞いて、それを拒んでいる人々の話ではなく、既に神を知っているとされる人々が、福音を知らないかのようなことを行なっているとい

う問題を取り上げました。そして、その原因が神に愛されているのに、その愛を弱さであるとし、むしろ反抗している、ということでした。それで主に愛され、育てられたのに、それでも悪い実を結んでしまったことを嘆いておられる神の心を読んでいます。

1B 実を結ぶための救い

私たちが、神の救いのご計画の中で知らなければいけないのは、神は私たちから実が結ばれることを願って、救っておられるということです。有名な、エペソ書 2 章 8-9 節にはこう書いてあります。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」けれども、その後でこう言っているんですね、「10 節 私たちは神の作品であって、良い行ないを**する**ためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」私たちは、行いによって救われたのではないですが、良い行いのために救われました。つまり、神が実を結ばせるために私たちをクリスチャンにしました。

イエス様は弟子たちにこう言われました。「ヨハネ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行つて実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、」初めに選んでくださったのは、神です。私たちは神の選びとその呼びかけに応答しましたが、私たちが選んだのではありません。ここが大事です、私たちが神を選んで、私たちのほうから良い行いを結ばせなければいけない、ということではありません。神が私たちを選ばれ、そして神が私たちに実を結ばせたいと願っておられます。

2B 神の憐れみ

そこで本文を見てください、主なる神はイスラエルをご自分の愛するぶどう畑に対して、こよなく愛しておられる姿を見ることができます。神ご自身の豊かな憐れみのゆえ、ただ彼らをいとおいと思われて、それで彼らをぶどう畑として、それを養い、守り、育てあげようとされました。覚えていますか、雅歌においても「ぶどう畑」が数多くでてきました。文字通りのぶどう畑を意味するところもありましたが、本人のことを指しているところが多かったです。こよなく愛していること、いつくしんでおられることを、この選びは意味しています。

私たちの生活で、いろいろな場面が出てきます。信仰の戦いがあります。試練や苦しみ、また誘惑もあります。まだ信仰をもって間もないのに迫害を受けていたテサロニケの信者たちに、パウロは大切なメッセージを送りました。「2テサロニケ 2:13 しかし、あなたがたのことについては、私たちはいつでも神に感謝しなければなりません。主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。」主が愛し、それで初めから救いにお選びになったのだよ、と使徒パウロは慰めました。どんな苦しみがあっても、それは主が彼らを嫌いになったということではなく、むしろ彼らを愛して、それで選ばれている

ことの印です、と教えてくださっています。神に選ばれたという言葉を書く時に、何かのコンテストで選抜されたというようなイメージを抱いてはいけません。そうではなく、慈しんで、愛して、それで育てたいと願われて選ばれたというイメージをいつも浮かべてください。

2A 神の関わり

そして、神は愛しているがゆえ、私たちの生活に関わられます。私たちの神は、私たちを野生種ではなく、栽培種として育てられます。ローマ 11 章には、イスラエルがオリーブの木に喩えられ、しかも栽培種のオリーブの木に喩えられています。私たち異邦人は野生種のオリーブの木です。そして、その枝が栽培種のオリーブの木に接ぎ木されたというのが私たち異邦人信者の姿です。ですから、私たちがイエス様を信じた時点で、神は私たちの生活に関与されます。関わってこられるので、私たちの生活が自然に流れていたようなものが、そこに不自然な流れができます。そして、何かの事柄に取り組みなければならなくなる。そしてそれらが、必ずしも心地よいものではなく、むしろ不快なものもあります。けれども、その不快に感じられるものも含めて、実は神が私たちを愛しているがゆえに、関わってくださることの印なのです。私たちを普通にはさせない、ただ神のみに頼る個人また集団として育て上げたいと願われています。私たちは野生ではなく、栽培されているからです。

1B 志と願い

ピリピ人への手紙の中に、次の言葉があります。「ピリピ 1:6 **あなたがたのうちに良い働きを始めた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです。**」私たちの内に、良い働きを始められるのです。これは比較的知られている聖句ですね。私たちはこれを、主が何か良いことを始められて、それをイエス様が戻って来られるまでに完成してくださるのだな、と思います。確かにその通りです、けれどもこの文脈を見ると、その良い業とは具体的には、「福音を広めることにあずかってきたこと」すなわち、パウロの宣教を支援するお金を送ったことなのです。福音宣教にある神の恵みに自分たちもあずかりたいと願って、具体的に支援金を送りました。

このように、主は私たちの志や願い、そういったものの働きかけて、それでご自分の働きをされます。ピリピ 2 章 13 節を見てください、「神は、**みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。**」1 章 6 節でも、ここ 2 章 13 節でも「あなたがたのうちに」と書かれています。神は、私たちが何かを願い、何かを志し、そうした中に働かれるので、私たちは神のなさりたいことのその現場にいる者たちとなります。傍観者であり続けようにも、それをできないようにされます。

それでも、「私は主の導きが分からない。主が私に関わってくださっているように思えない。」という方は、次の喩えでお分かりになるかもしれません。洪水が起こりました。それで自分は沈みかけている家の屋根の上で救援を待っています。その時に、主が自分を助けてくださると思っていまし

た。すると、自衛隊のヘリコプターが来ました。助けがやってきましたが、「いいえ、断ります、私は主からの助けに拘りますから。」そして、ゴムボートでも自衛隊の人が助けに来ました。「いいえ、断ります。私は主からの助けを待っていますから。」他にも助けが来たのですが、すべて断りました。ついに家は沈み、自分も溺死しました。そして天に入りました。私は叫びます。「どうして、主よ、私はあなたを信じて、本気で信じて、人の助けに頼らないで待っていたのですよ。」すると主が言われます、「わたしは、何度も助けに来たのだ。自衛隊のヘリコプター、ゴムボート、その他の手段を使って助けに来たのだ。」

このように、私たちの周りには主があなたの中で、またあなたの周りで働かれようとしている、その御手が広げられています。それを、なぜか「いや、これは導きではない。」として決め込んでいませんか？何かを求めているけれども、それは自分の心地の良い領域で収めていないでしょうか？それとも、目の前にあるいろいろな、福音宣教や慈善ための機会を、何らかの理由で心を閉ざしてはいませんか？主があなたの内で働き、志を立てさせ、それで救いを達成させたいと願っておられます。心を広げさえすれば、主は瞬間にいろいろなことをして下さいます。

2B 良い業を完成される方

そして、ご自身が私たちの内で働き、それで主はそれをご自分の実として収穫されます。聖められた私たち自身が、神への実となります。「1テサロニケ 5:23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをして下さいます。」

3A 育てられる実

1B 愛の応答

使徒パウロは、ガラテヤ人への手紙の中で聖霊が働かれる時に、私たちから表れるもの、その実を教えています。「ガラテヤ 5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」ここの「御霊の実は」という言葉は、英語ですと単数になっています。つまり、御霊の実は単数、愛だけです。そしてその後は、愛の特徴と言っているでしょう。愛によって、私たちは喜びと平安が与えられます。そして愛によって、私たちは忍耐し、また親切にし、善意を持ち、誠実、柔和、自制を働かせます。私たちは愛に満たされた人になる、これが、神が私たちから刈り取りたいと願っておられる実であります。

そこで大事になるのは、再び、私たち側の応答です。雅歌の学びを思い出してください、シユラムの女がソロモンにこう言いました。「雅歌 7:12 私たちは朝早くからぶどう畑に行き、ぶどうの木が芽を出したか、花が咲いたか、ざくろの花が咲いたかどうかを見て、そこで私の愛をあなたにささげましょう。」男女の営みにおいて、その愛が実を結ぶためには、相互のやりとりが必要です。一方だけが働きかけても、相手の切実な応答がなければ、その実は結ばれません。これは結婚生

活をしている夫婦であれば誰もが知っているでしょう。愛というものは、育むものです。そして新婚生活よりも、年を経ればそれだけ円熟し、その愛が真実なものになってきます。

私たちの愛する主は、同じように私たちに実を結ばせようとしておられます。主は弟子たちを愛してやみませんでした。そしてご自身が死に渡される前夜、弟子たちの間でその足を洗い、それから、「あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。(ヨハネ 13:34)」と言われました。そしてその食事の場を離れて、オリブ山のふもとにあるゲッセマネの園に向かわれました。その時に、ぶどうの木が彫られている装飾のある神殿のそばを通りかかったのでしょうか、主はぶどう園について語り始められたのです。そこに、主が私たちをこよなく愛された、その愛への応答について詳しく教えておられます。

ヨハネ 15 章です。「15:1-3 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。」イエス様は、私たちにその愛を育まれる時に、刈り込みを行われます。その刈り込みによって、さらに多くの実を結ぶためです。不純なもの、役に立たないもの、そうしたものを刈り込まれることによって、その残されたものが良い実を多く結ばせることができます。そして次に、イエス様はみことばを与えられます。ですから、刈り込みを行われ、そしてみことばで私たちを洗ってくださいます。私たちは、試練を受けたいとは思いません。そして何かが取られることを、もちろん好みません。しかし、イエス様はそれを行なわれることによって、私たちの魂を御言葉で洗い清めることができになります。

そして続けてこう言われました。「15:4-5 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」私たちが刈り込まれ、そして御言葉によって洗われるとそこに見えるのは、イエスご自身であります。この方に拠り頼みます。この方の内に留まります。主は留まっている者の内に留まってくださいます。ですから、自分の内でキリストの愛が育まれます。そして、この方から離れては何もできないのだと悟ることができます。そして、自分ではなく、いや自分は無になって、それでキリストが生きてくださり、それで多くの実を神は結ばせるのです。

2B 悪い実

これが、神が私たちを選び、聖霊によって、キリストの愛の実を結ばせる方法です。けれども、ここイザヤ書 5 章では、悪性のぶどう、腐ったぶどうができてしまいました。7 節を見ると、それは流血であり、泣き叫びでありました。主が愛され育てられたのに、その人々が主の願われていたこと

と反対の実を結ばせてしまいました。これは皮肉であり、私たちへの警告です。キリストを知っているはずのものが、その知識のゆえにかえって反対のを行ない得ることを表しています。イエスは、この箇所を引用して、ご自分がエルサレムの神殿にいる時にそこにいた宗教指導者たちに語られました。マタイ 21 章 33 節から読みます。

33 もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。34 さて、収穫の 때가近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。35 すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりには袋だたきにし、もうひとりには殺し、もうひとりには石で打った。36 そこでもう一度、前よりももっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。

33 節は、イザヤ書 5 章 1-2 節の言葉です。そして、農夫であります、彼らはそこにいる宗教指導者らです。そして収穫を得ようとして主人が遣わす僕は、預言者たちであります。ところが、農夫たち、すなわちその時の王や祭司などの指導者たちは、預言者を迫害しました。それが、旧約聖書における預言者たちの多くが辿った道でした。そして、こう続きます。

37 しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう。』と言って、息子を遣わした。38 すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』39 そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。

この「息子」は、イエスご自身です。ところが農夫たちは、彼が跡取りだから、彼の財産を自分の手に入れられるということで、なんと殺してしまいました。これが実際に起こったことです。彼らは預言者たちを迫害し、そして最後に御子ご自身を殺しました。

良い実が結ばれるところが、このような悪い実になってしまった。それは何だったのか？一つは、預言者に対する迫害は、「自分に心が刺されること、それを拒んだ。」ということです。主の与えられる言葉は、心を指します。しかし、それは魂の癒しを得るための言葉であり、私たちを回復させるものです。「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。(2テモテ 3:16)」したがって、危険なことは、自分が刺されることを回避しながら御言葉を聞くことです。自分が守れると思うところだけ取捨選択する、あるいは拡大解釈して聞くこと。あるいは、ただ聞いているだけで、それを適用せずに実践しないこと。こうしたことを行なうことによって、聞けば聞くほど、悪い実が私たちの心に芽生えていきます。

もう一つは、息子を遣わされた農夫たちが、「跡取りだから、財産を手に入れられる」と言ったことです。主によって与えられたその恵みを、私物化することです。「私たちがここに私たちの空間、私

たちの守れるものを作ります。」として、神の恵みを自分のものとする、所有とすることです。主から与えられている時間、金銭、また人々をさえ、自分の必要を満たすために用いていきます。そうすると、神から与えられれば、与えられるほど、その霊的な既得権は大きくなり、悪い実を結んでいきます。そしてイエス様が語られたように、このようになったのです。

気をつけたいですね。私たちは、イエス様の刈り込みを心に歓迎しましょう。主が何かをしておられます、それは主が愛しておられ、関わりたいと願っておられるからです。主から与えられている機会の中に生きましょう。主は実を結ばせたいと願われています。主はみなさんをぶどう畑であると呼ばれます。その愛の中で育まれてください。